

# 動詞〈隠れる〉と〈隠す〉の自他対応について

関口 雄基

キーワード： 自他対応、〈隠れる〉、〈隠す〉、有情物、無情物、意志性、コーパス

## 要 旨

日本語の自動詞と他動詞の対応については、これまで多くの研究が蓄積されてきた。早津 (1987) が指摘するように、対応する他動詞を持つ自動詞は、無情物を主語とすることが多く、また働きかけによって引き起こし得る無情物の変化を表すことが多いとされている。一方で、日本語の自動詞と他動詞の対には自動詞の主語に有情物を取り得る動詞が存在する。〈隠れる〉と〈隠す〉の対もこうした自動詞と他動詞の対として挙げることができ、「顔が隠れる」のようにガ格名詞句に無情物を取る一方で「太郎が草むらに隠れる」のように有情物を取ることができる。〈隠れる〉という動詞のガ格名詞句は「(変化の) 対象」と「動作主」の双方の解釈ができると考えられる。本稿では、自動詞〈隠れる〉と他動詞〈隠す〉について、それぞれガ格とヲ格に取る名詞をコーパスで調査し、両者の対応関係について記述的な分析を試みる。結論として、“何かの一部・一側面”を表す名詞のときは、二つの動詞が構文的に対応しやすく、逆に“感情”を表す名詞など非意図的に「隠れる」という状態になりにくい名詞は、他動詞のヲ格にのみ出現しやすいことを主張する。更に、〈隠れる〉/〈隠す〉場所を表すニ格とデ格の現れ方についても分析を行い、自動詞文においてニ格が有情物と、デ格が無情物と共起しやすいという傾向があることを示す。

## 1. はじめに

動詞の意味や機能について考える際に、自動詞と他動詞の対応がしばしば問題になる。自動詞と他動詞の対応に関する問題は、形態論や統語論・音韻論など、広く言語学の分野において横断的に位置づけられるものであり、これまでに様々な側面から多

くの研究が蓄積されてきた。

奥津 (1967) 以降、日本語の自動詞と他動詞の対応関係に関する研究は、動詞の形態面のみならず、構文的レベルでの対応関係も重視されるようになった。奥津 (1967) は、いわゆる自動詞と他動詞の対応について、「二つの動詞があり、自動 [-transitive] 他動 [+transitive] という対立、およびそれに必然的に関連する特徴のちがいを除いては、全ての文法的、意味的特徴を共有する時、この二動詞間に自他の対応がある」(奥津 1967:49) ものとした。この考え方は自他対応を、① 形態的条件、② 構文的条件、③ 意味的条件という、3 つの条件を満たすときのみ起こる現象とするという、現在の自他に関する最も一般的な捉え方を示すものとなっている。佐藤 (1994) はこれらの3条件について (1) のように定義している。

(1) 日本語における典型的な自他対応について (佐藤 1994: 21)

- a. 形態的条件: 自動詞と他動詞が同一の語根を共有している。
- b. 統語的条件: 自動詞文のガ格と他動詞文のヲ格が同一の名詞句で対応している。
- c. 意味的条件: 自動詞文と他動詞文が同一の事態の側面を叙述していると解釈可能である<sup>1</sup>。

- (2) a. 太郎が<sup>ガ</sup> 鉛筆を 折る。 (or-u) (佐藤 1994:21,2b)  
b. 鉛筆が<sup>ガ</sup> 折れる。 (or-e-ru) (佐藤 1994:21,2a)

例えば、(2) に示すように、他動詞〈折る〉(or-u) と自動詞〈折れる〉(or-e-ru) は or という共通の語根を共有しており、(1a) の形態的条件を満たしていることになる。また、自動詞文のガ格と他動詞文のヲ格が「鉛筆」という同一の名詞句になっていることから、(1b) の統語的条件も満たしていると考えられる。そして、両者は「鉛筆が折れた状態に変化する」という同一の事象を共有していると解釈できることから、(1c) の意味的条件も満たしていることになる。よって3つの条件を満たすことから、(2) は、典型的な自他対応を持つ構文ということができるのである (佐藤 1994:21)。以上のような見解から、日本語の自動詞と他動詞の対応は、概ね以下のように一般化することができるだろう:

---

<sup>1</sup> 但し、「意味的条件」については「統語的条件」と同じ意味で用いられることが多く、これだけが取り沙汰されることは少ない。

(3) 典型的に自他対応がある動詞群の構文的対応関係

(cf. 奥津 1967, 早津 1987 など)

- a. 「動作主」 **ガ** 「(変化の) 対象」 **ヲ** 他動詞。  
b. 「(変化の) 対象」 **ガ** 自動詞。

一方で、日本語の自動詞と他動詞には、上記のような対応関係を持ちながらも、自動詞のガ格名詞句が「(変化の) 対象」のみならず「動作主」としても解釈可能な動詞のペアも存在する:

(4) 〈隠れる〉 / 〈隠す〉

- a. 彼女は胸のダイヤをコートで隠した (kaku-su) (cf. 沼田 1989:201,13a)  
b. 胸のダイヤがコートで隠れた (kaku-reru) (cf. 沼田 1989:201,13b)  
c. 太郎が草むらに隠れた (kaku-reru)

(5) 〈乗る〉 / 〈乗せる〉

- a. 太郎がうどんに卵を乗せる。 (no-seru)  
b. うどんに卵が乗る。 (no-ru)  
c. 太郎が汽車に乗る。 (no-ru)

(6) 〈進む〉 / 〈進める〉

- a. 太郎が研究を進める。 (susum-eru)  
b. 研究が進む。 (susum-u)  
c. 太郎が大学院に進む。 (susum-u)

(4b)(5b)(6b) の自動詞文は、それぞれ (4a)(5a)(6a) の他動詞文に対応するものであり、ガ格で明示される名詞句は、「(変化の) 対象」つまり、他動詞文のヲ格に相当するものである。一方で (4c)(5c)(6c) の自動詞文はガ格で明示される名詞句は、通常「動作主」として解釈されるものと考えられる。つまり、(4)~(6) で示した〈隠れる〉〈乗る〉〈進む〉という自動詞は、それぞれ〈隠す〉〈乗せる〉〈進める〉という構文的にも対応する他動詞を持つ一方で、典型的な自他対応の形式とは異なった形式の構文を持っているのである。

本稿では、(4)~(6) のようにガ格に「動作主」と「(変化の) 対象」の双方を取り得

る自動詞と他動詞の対応について、特に〈隠れる〉と〈隠す〉を例として取り上げ、自動詞〈隠れる〉のガ格に来る名詞句と他動詞〈隠す〉のヲ格に来る名詞句を、コーパスを使用して調査することで、こうした動詞の語彙的特徴と対応関係について考察を試みる。また、有情物と無情物という観点から「隠れる」/「隠す」場所を表すニ格とデ格の現れ方についても分析を試みることにする。

## 2. 先行研究及び辞書の記述について

沼田 (1989) では、形態的には対応しているものの、自動詞と他動詞の意味が多義であり、意味によっては自動詞と他動詞の対応関係を欠くものについて、記述論的な観点から分析を行っている。沼田 (1989) によれば、〈隠れる〉という動詞には、大きく分けて「何かに遮られて対象が見えなくなる」と「意図的に人から見えなくなる所に身を置く」という2つの意味があり、前者の意味のときは、主語に有情物、無情物の双方を取り、更に他動詞〈隠す〉が対応するのに対して、後者の意味のときは有情物しか主語にならず、他動詞〈隠す〉と対応しないという<sup>2</sup>：

(7) 〈隠れる〉が「何かに遮られて対象が見えなくなる」という意味の時の自他対応

a. うちの子の体は小さいから大きい子達の体にかくれてちっとも見えやしない。

(沼田 1989:208, 62a)

b. 大きい子達がその体でうちの子をかくすからうちの子がちっとも見えやしない。

(沼田 1989:209, 62b)

c. 村は鎮守の杉森の陰に半ばかくれているが...

(沼田 1989:208, 63a)

d. 鎮守の杉林の陰が村を半ばかくしているが...

(沼田 1989:209, 63b)

(8) 〈隠れる〉が「意図的に人から見えなくなる所に身を置く」という意味の時の自他対応

---

<sup>2</sup> 沼田 (1989) によれば、〈隠れる〉が「意図的に人から見えなくなる所に身を置く」という意味のとき、〈隠す〉の代わりに〈匿う〉が対応するという。

(i) a. 犯人は物置小屋の中にかくれた。 (沼田 1989:208, 64a)

b. 彼は犯人を物置小屋の中にかくまった。 (沼田 1989:209, 64b)

- a. 犯人は物置小屋の中にかくれた。 (沼田 1989:208, 64a)
- b. ? 彼は犯人を物置小屋の中にかくした。
- c. \*太郎の宝物は秘密の場所にかくれた。 (沼田 1989:209, 65)
- d. 彼は太郎の宝物を秘密の場所にかくした。

(7) で示すように、〈隠れる〉が「何かに遮られて対象が見えなくなる」という意味を持つとき、主語は「うちの子」(=7a) という有情物と「村」(=7c) という無情物の双方を取ることができ、それぞれ (7b)、(7d) のように他動詞〈隠す〉と構文的に対応するが、(8) で示すように、〈隠れる〉が「意図的に人から見えなくなる所に身を置く」という意味を持つときは、(8a) のように、「犯人」という有情物は主語になるが、(8c) のように、無情物である「太郎の宝物」は主語にならず、他動詞〈隠す〉とは対応しないことになる(沼田 1989:208-209)。

ここで、国語辞典における、〈隠れる〉と〈隠す〉の語釈及び用例について確認する。北原保雄編 (2010) 『明鏡国語辞典 第二版』では、〈隠れる〉〈隠す〉は以下のように記述されている:

(9) 『明鏡国語辞典 第二版』における〈隠れる〉の記述:

- a. ① 人目のつかないところに身をおく。身を隠す。  
「物陰に一」「カニが慌てて穴に一」「納屋に一れていたところを捕らえる」「逃げも一もしない(同窓と対決する)ぞ」「権力の陰に一れて専横の限りを尽くす」
- b. ② 視界がさえぎられて物がみえなくなる。  
「月が雲に一」「顔が帽子に/で一」「氷山の大半は海面下に一れている」「名選手に一れて目立たない」
- c. ③ 物事が表面から見えない状態で存在する。  
「事件の裏に多くの謎が一れている」「歓喜の底に深い失望が一れている」
- d. ④ 《「一・れた」の形で、連体的に》覆われたり埋もれたりして、人に知られることがない意を表す。  
「世に一れた逸材を発掘する」「一れた本性をあらわにする」
- e. ⑤ 《(...に) 一・れて」「...から一・れて」の形で、副詞的に》人の目を盗んでこっそりと。人に知られることなくこっそりと。ひそかに。  
「世に一れて悪事を働く」「監視の目から一れてタバコを吸う」

f. ⑥ 《「お一・れになる」の形で》身分の高い人が死ぬ。

「天子様がお一れになった」

(10) 『明鏡国語辞典 第二版』 における〈隠す〉の記述:

a. ① ① しまい込んだり物でおおったりして、人目につかないようにする。

「お菓子を戸棚の奥に一」「証拠を裏山に一」「両手で顔を一」「頭一して尻(しり) 一さず」

b. ② 《身[姿]を一》などの形で》身をひそめたり、姿をくらましたりして、所在が知れなくなる。

「物陰に身を一」「こっそりと姿を一」「行方を一」

c. ③ 物事を人に知られないようにする。秘密にする。

「国民の目から真相を一」「人心の荒廢は我々の目には一しようがない」

「本心を一」「衝撃[不安の色]を一」「宇宙の一された(=未解決の)謎(なぞ)に迫る」

沼田 (1989) が示す「何かに遮られて対象が見えなくなる」という意味は、おおよそ (9b)(9c)(9d) に対応し、「意図的に人から見えなくなる所に身を置く」という意味は、(9a)(9e) に対応すると考えられるだろう。辞書の記述からも分かるように、動詞〈隠れる〉の主体は、有情物と無情物の双方を取り得ることが分かる。また、(10) で示したように、〈隠す〉の語釈及び用例の中に、ヲ格に有情物を取るものが記載されていないことから、〈隠す〉のヲ格名詞句は有情物を取りづらいことが、この時点では推測できる。いずれにしても沼田 (1989) が指摘するように、〈隠れる〉と〈隠す〉の対応について考える上で、自動詞のガ格及び他動詞のヲ格に来るものが、有情物か無情物かという観点から、両者の自他交替を大きく左右する可能性があるという点において、一つの重要なポイントとなり得ることが考えられよう。次節以降では、〈隠れる〉のガ格名詞句と〈隠す〉のヲ格名詞句の特徴について、コーパス調査の結果を基に記述論的な分析を試みる。

### 3. コーパスを使った調査について

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) をコーパスアプリケーション「中納言」(ver.2.4)を用いて、自動詞〈隠れる〉と他動詞〈隠す〉の用例を抽出した。自動

詞〈隠れる〉は、キーに品詞「大分類」の「名詞」、後方共起条件のキーから1語に「書字形出現形」の「が」、後方共起条件のキーから10語以内<sup>3</sup>に「語彙素」の〈隠れる〉と指定して検索をかけた。また、〈隠す〉についてはキーに品詞「大分類」の名詞、後方共起条件のキーから1語に「書字形出現形」の「を」、後方共起条件のキーから10語以内に「語彙素」の「隠す」と指定して検索をかけた。こうすることで、自動詞〈隠れる〉のガ格と、他動詞〈隠す〉のヲ格に出現しやすい名詞を調査した。

## 4. 調査の結果と考察

### 4.1 自動詞〈隠れる〉のガ格名詞句

#### 4.1.1. 自動詞〈隠れる〉のガ格名詞句

3節で示した方法で自動詞〈隠れる〉を検索の結果、合計530例の用例がヒットした。そのうち、ガ格名詞句と〈隠れる〉が対応していない用例を目視で取り除き、計400例についてガ格名詞句の用例数を分類した<sup>4</sup>。以下は自動詞〈隠れる〉の出現頻度が高かったガ格名詞句上位20位以内の結果である：

(11) 自動詞〈隠れる〉の出現頻度が高かったガ格名詞句上位20位以内のもの  
(総出現数; 順位)

“人名” (29例; 1位)、顔 (16例; 2位)、太陽 (12例; 3位)、人 (10例; 4位)、物 (9例; 5位) 月 (7例; 6位)、尻 (5例; 7位)、部分 (5例; 7位)、姿 (4例; 9位)、人間 (4例; 9位)、男 (4例; 9位)、膝 (4例; 9位)、病気 (4例; 9位)、バー (3例; 14位)、花 (3例; 14位)、子供 (3例; 14位)、耳 (3例; 14位)、自分 (3例; 14位)、要素 (3例; 14位)、瑕疵 (3例; 14位)

上位20位以内のガ格名詞句の用例の中で、有情物 ([+animate]) の用例は134例中53例 (39.55%)、無情物 ([-animate]) の用例は、81例 (60.45%) であった。更に出現し

---

<sup>3</sup> 「キーから10語以内」というのは、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)をコーパスアプリケーション「中納言」(ver.2.4)において、対象語から離れて共起するものを検索できる、最大の値である。

<sup>4</sup> 〈隠れる〉の主語が明示されていない場合や、「が」以外の助詞で明示される場合、更には被連体修飾名詞として現れる場合も考えられるが、本稿では、ひとまず「が」で表示されているもののみを考察の対象とした。

た用例全体では、有情物 ([+animate]) が 400 例中 130 例 (32.50%)、無情物 ([-animate]) が 270 例 (67.50%) という結果になった。今回、〈隠れる〉の主語が、格助詞〈が〉で表示されるものに限って調査を行ったため、自動詞〈隠れる〉の主語が無情物に偏りやすいと断定することはできないが、少なくとも自動詞〈隠れる〉の主語がガ格で表示される場合は、無情物が多くなることが分かった<sup>5</sup>。

#### 4.1.2. 自動詞〈隠れる〉と二格・デ格

自動詞〈隠れる〉は、場所等を表す二格を伴う用例が多く散見された。そこで、今回採取した 400 例の中で、二格を伴う用例をガ格名詞句が有情物のものと、無情物のものに分類したところ、有情物のものが、130 例中のうち 74 例 (56.92%)、無情物のものが 270 例のうち 107 例 (39.63%) という結果になり、有情物の方が、場所を表す二格名詞句と共にしやすくなることが分かった。以下はそれぞれの用例の一部である：

#### (12) 有情物 ([+animate]) ガ格と場所・二格が共起している用例<sup>6</sup>

- a. アマテラスが岩戸に隠れて世界が真っ暗になってしまったとき、八百万の神々がどうしたらアマテラスを岩戸の外へひっぱり出すことができるか相談したところだという。 (高山文彦『鬼降る森』2004年)
- b. つぎの日、お隣が休暇旅行から帰ってくると、家はすっからかんになっていたの。つまりソファの中にひとがかくれていて、夜のあいだにすべての絨毯を巻きあげてしまったってわけ。  
(ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ著池田香代子・真田健司訳『悪魔のほくら』1992年)
- c. 「そ、そりゃあ、わしらの中に犯人がいる場合じゃろう？」勝川さんがあせったように言った。「犯人が山の中に隠れておったのなら、アリバイなんて関係がないんじゃないかね？」 (風見潤『月食屋敷幽霊事件』2005年)
- d. 署員は現場に急行すると、ジャッキを持った会社員 (二十八) が「子猫がタイヤの内側に隠れていて何をやってもどいてくれなかったから」と、わざわざ車を持ち上げて逃がしたという。 (中日新聞社「中日新聞 朝刊」2001/8/1)
- e. その中でも印象的なのは、ヒョウの母子の物語だった。一匹のヒョウの幼子が

<sup>5</sup> 〈隠れる〉のガ格名詞句が有情物の場合、ガ格名詞句が省略されることが多いのではないかと筆者は推察する。

<sup>6</sup> 下線や太字による強調及び、二格とデ格の置換可能性を示す「( / で ) / ( /\* で )」は筆者による。



木の枝に隠れながら狩りに出かけた母の帰りをじっと待っていた。ギラギラした太陽に照らされ、のどは渇き、もちろん飢えきっている。

(酒井和夫『いま、何故彼=マザコン=がモテはやされるのか』1997年)

(13) 無情物 ([-animate]) ガ格と場所・ニ格が共起している用例

- a. 赤ちゃんが力を抜いて頭を床につけたら、背中をやさしくなめます。布団などに顔が隠れて呼吸を妨げないように注意しましょう。

(久保田競『能力と意欲を伸ばす積極育児法』2004年)

- b. 今日は撮影する場所もないほどの大勢の撮り鉄さんが来ていました。「SLばんえつ物語号」が来る数分前に太陽が雲に隠れてしまいました。今日の煙は昨日よりも多く、舞台田でこのような煙を吐くC五十七を見たのは久しぶりでした。

(Yahoo! ブログ 2008年)

- c. まだまだ、蕾がほとんどでしたが、花が開いているものもありました。薄いピンクの花が、葉っぱに隠れるように咲いていました。(Yahoo! ブログ 2008年)

- d. 送られたメッセージに対して予測した通りのメッセージが返され、交流が続いていく「相補交流」、予期せぬ反応や行き違いが起こる「交叉交流」、言葉の裏に別の動機や目的が隠れている「裏面交流」があります。

(渋谷昌三『手にとるように心理学がわかる本:何があなたの心を動かすのか?』1999年)

- e. 「まあ、なんとドジなんだろう」と思われるかもしれないが、階段の入り口がとても分かりづらいところに隠れるようにあり、その「発見」に時間がかかってしまう。

(伊関武夫『ドイツ手作り紀行: 熟年夫婦と森の国の人々』2005年)

ニ格名詞句は、ガ格名詞句が有情物か無情物かによって少々性質が異なると考えられる。例外はあるものの<sup>7</sup>、ガ格名詞句が無情物のものはニ格がデ格で置き換えられるものが多いのに対して、有情物のものは置き換えられないものが多い:

(14) 有情物 ([+animate]) ガ格とニ格・デ格の交替<sup>8</sup>

<sup>7</sup> 例えば後掲する、(15c) は「ように」という比況の助動詞の作用により、「薄いピンクの花」が擬人化され有情物のような振る舞いをしているため、デ格に置き換えにくいものと推測する。また、(15d) (15e) は、注 10 で後述するように、ニ格名詞句に「裏」「所」という場所を表す名詞が含まれていることが、要因として考えられる。

<sup>8</sup> 下線や太字による強調及び、ニ格とデ格の置換可能性を示す「( / で) / ( /\* で) / (? で)」は筆

- a. アマテラスが岩戸に(/\*で) 隠れて世界が真っ暗になってしまったとき、八百万の神々がどうしたらアマテラスを岩戸の外へひっぱり出すことができるか相談したところだという。(高山文彦『鬼降る森』2004年)
- b. つぎの日、お隣が休暇旅行から帰ってくると、家はすっからかんになっていたの。つまりソファの中に(/\*で) ひとがかくれていて、夜のあいだにすべての絨毯を巻きあげてしまったってわけ。(ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ著/池田香代子・真田健司訳『悪魔のほくら』1992年)
- c. 「そ、そりゃあ、わしらの中に犯人がいる場合じゃろう？」勝川さんがあせったように言った。「犯人が山の中に(/?で) 隠れておったのなら、アリバイなんて関係がないんじゃないかね？」(風見潤『月食屋敷幽霊事件』2005年)
- d. 署員は現場に急行すると、ジャッキを持った会社員(二十八)が「子猫がタイヤの内側に(/\*で) 隠れていて何をやってもどいてくれなかったから」と、わざわざ車を持ち上げて逃がしたという。(中日新聞社「中日新聞 朝刊」2001/8/1)
- e. その中でも印象的なのは、ヒョウの母子の物語だった。一匹のヒョウの幼子が木の枝に(/\*で) 隠れながら狩りに出かけた母の帰りをじっと待っていた。ギラギラした太陽に照らされ、のどは渇き、もちろん飢えきっている。(酒井和夫『いま、何故彼=マザコン=がモテはやされるのか』1997年)

(15) 無情物 ([-animete]) ガ格とニ格・デ格の交替

- a. 赤ちゃんが力を抜いて頭を床につけたら、背中をやさしくなめます。布団などに(/で) 顔が隠れて呼吸を妨げないよう注意しましょう。(久保田競『能力と意欲を伸ばす積極育児法』2004年)
- b. 今日は撮影する場所もないほどの大勢の撮り鉄さんが来ていました。「SLばんえつ物語号」が来る数分前に太陽が雲に(/で) 隠れてしまいました。今日の煙は昨日よりも多く、舞台田でこのような煙を吐くC五十七を見たのは久しぶりでした。(Yahoo! ブログ 2008年)
- c. まだまだ、蕾がほとんどでしたが、花が開いているものもありました。薄いピンクの花が、葉っぱに(/?で) 隠れるように咲いていました。(Yahoo! ブログ 2008年)
- d. 送られたメッセージに対して予測した通りのメッセージが返され、交流が続いていく「相補交流」、予期せぬ反応や行き違いが起こる「交叉交流」、言葉の

裏に(/?で)別の動機や目的が隠れている「裏面交流」があります。

(渋谷昌三『手にとるように心理学がわかる本:何があなたの心を動かすのか?』1999年)

- e. 「まあ、なんとドジなんだろう」と思われるかもしれないが、階段の入り口がとても分かりづらいところに(/?で) 隠れるようにあり、その「発見」に時間がかかってしまう。

(伊関武夫『ドイツ手作り紀行: 熟年夫婦と森の国の人々』2005年)

そこで、動詞や名詞の共起関係や文法関係を網羅的に表示することができるコーパスシステムである、NINJAL-LWP for BCCWJ (国立国語研究所) を使用し、逆にデ格と共起する自動詞〈隠れる〉を調査したところ、以下のように「隠れる」対象が無情物になるものが多くヒットした<sup>9</sup>。

(16) 場所のデ格と共起する自動詞〈隠れる〉

- a. 顔がタオルで半分隠れてる分、似てるとは思う・・・

(Yahoo!ブログ 2008年)

- b. あたまの傷口は髪の毛で隠れるが、手の痕は残るやも知れんぞ

(山本一力『あかね空』2004年)

- c. 濃紺のスカートで膝が隠れていても、背中にまわされた両肘はきつく拘束されたまま。

(龍島穰『人妻秘書』2001年)

- d. スカートの上の部分が上着で隠れるのなら、クリップで留めてみては?

(Yahoo!知恵袋 2005年)

また、他動詞〈隠す〉と二格/デ格の共起について NINJAL-LWP for BCCWJ (国立国語研究所) で検索した用例を見てみると、二格が「場所」もしくは「着点」を表すのに対し、デ格が「原因」や「手段」としての解釈が強くなるのが推測される<sup>10</sup>。

<sup>9</sup> 以下のように有情物と共起するデ格も存在したが数は少なく、むしろ二格に置き換えた方が自然だと考えられる。

(ii) [...] 性格も個性も違う四人組だったが、ゴードイの家の裏庭に組み立てた小屋の中で (/ に) 隠れてタバコを吸ったり[...] (『リヴァーフエニックス伝説』2003年)

<sup>10</sup> 他動詞〈隠す〉の二格には、「中」「上」「下」「裏」「奥」「間」「後ろ」など場所を表す名詞が多く現れる。このような場所を表す名詞を二格に取る場合、デ格に置き換えにくいと

(17) 他動詞〈隠す〉と二格名詞句

- a. すべては霧の中に隠されているのだ。レーダーだけが、各砲弾の弾着と、それに引き裂かれて荒れ狂う海面でのたうちもぐランチの姿をとらえていた。

(フレデリック・フォーサイス著/篠原慎訳『悪魔の選択』1979年)

- b. レストランか何か開いているようだ。上衣の下に銃を隠すんだ。誰かに呼び止められたら、おれが話をつけるからな」

(トマスペリー著/飯島宏訳『メッツガーの犬』1986年)

- c. ナイフがああソファの裏に隠してあった。隠すつもりならなぜ持ち去らなかったのか?

(赤川次郎『華麗なる探偵たち』1984年)

- d. じゃあ、その手にしてるメロンパンはな～に?」矢口真里が笑うと、辻はメロンパンをあわてて後ろに隠した。「もう、辻ちゃんったら。」

(楠末莉『ミニモニ。におまかせ!』2003年)

- e. 果たして、男は懷に隠していたドスを抜き放った。その冷たい刀身で、朱緒の頬をピタピタと叩く。

(綾乃なつき『夢見る乙女じゃいられない』1998年)

(18) 他動詞〈隠す〉とデ格名詞句

- a. ふたりの白人男があたしを見つめながら、手で口元を隠して何か話してる。

(リザ・コディ著/堀内静子訳『汚れた守護天使』1998年)

- b. 新庄はタオルで体を隠したまま湯船に立ち、動かない。

(川上稔『終わりのクロニケル』2003年)

---

考えられる:

- (iii) a. \*すべては霧の中で隠されているのだ。レーダーだけが、各砲弾の弾着と、それに引き裂かれて荒れ狂う海面でのたうちもぐランチの姿をとらえていた。

(cf.17a)

- b. \*レストランか何か開いているようだ。上衣の下で銃を隠すんだ。誰かに呼び止められたら、おれが話をつけるからな」

(cf.17b)

- c. \*ナイフがああソファの裏で隠してあった。隠すつもりならなぜ持ち去らなかったのか?

(cf.17c)

- d. \*じゃあ、その手にしてるメロンパンはな～に?」矢口真里が笑うと、辻はメロンパンをあわてて後ろで隠した。「もう、辻ちゃんったら。」

(cf.17d)

- c. 襟や腕で顔を隠しながら、腹でも痛むように体を丸める。  
(倉世春『姫將軍と黄金王子』2004年)
- d. 久四郎は藁笠をかぶり、目覆い頭巾でかおをかくし、味噌売りに化ける。  
(津本陽『乱世、夢幻の如し』1997年)
- e. 派手な化粧で年齢を隠そうとしているのがうかがえた。  
(天童荒太『幻世の祈り』2004年)

自動詞〈隠れる〉と他動詞〈隠す〉の交替において、ニ格が表す成分は典型的には、ガ格・ヲ格で示される名詞句の「隠れる」ための「場所」「着点」と考えられ、デ格が表す成分は「隠れる」という状態になる「原因」や「手段」と考えられる。自動詞〈隠れる〉において、ガ格で示される名詞句が有情物である場合、「意図的に人から見えなくなる所に身を置く」（沼田 1989）という意味を持つことが多いため、「隠れる」原因が明示されることは考えにくく、ニ格で示される成分をデ格に置き換えることは困難になる。一方でガ格名詞句が無情物である場合は、擬人法など特別な場合を除いて、基本的に「何かに遮られて対象が見えなくなる」（沼田 1989）の意味を持つことになる。この場合、ニ格で示される成分は、「原因」「手段」と読み替えることが可能になり、デ格との交替が起こると考えられる<sup>11</sup>。

#### 4.2 他動詞〈隠す〉のヲ格名詞句

前節では自動詞〈隠れる〉のガ格名詞句と場所のニ格等について、コーパスでの検索結果を基に分析を試みた。本節では、他動詞〈隠す〉のヲ格名詞句について分析を

<sup>11</sup> 〈隠れる〉と〈隠す〉のニ格とデ格の振舞い方は、川野 (1997) (2004) (2006) 等が指摘する、「餅くみ交替」（ニ/デ格交替）に類似するものである。川野 (1997) では、(iii a) (iv a) のように、ニ格で標示される構文を「位置変化構文」、(iii b) (iv a) のようにデ格で標示される構文を「状態変化構文」としている。

- (iv) a. 雲に月が隠れる。 (川野 1997: 36, (48a)) (位置変化構文)  
b. 月が雲で隠れる。 (川野 1997: 36, (48b)) (状態変化構文)
- (v) a. 布団に本を隠す。 (川野 1997: 36, (45a)) (位置変化構文)  
b. 本を布団で隠す。 (川野 1997: 36, (45b)) (状態変化構文)

本稿において提示している、自動詞文におけるガ格名詞句に有情物が来るときはニ格、無情物が来るときはデ格を取りやすいという現象についても、川野 (1997) 等が提案するように、前者が、有情物かつその文の「動作主」として解釈できるガ格名詞句が「場所」「着点」を表すニ格名詞句に移動するという「位置変化構文」として、後者が無情物かつその文の「(変化の) 対象」として解釈できるガ格名詞句が「原因」「手段」を表すデ格名詞句によって「隠れる」という状態に変化するという「状態変化構文」として位置づけることができると推察する。

試みる。3節で示した方法で他動詞〈隠す〉を検索した結果、合計 2957 例の用例がヒットした。このうちヲ格名詞句と「隠す」が対応していない例を目視で取り除き、計 2044 例についてヲ格名詞句の用例数を分類した。

以下は他動詞〈隠す〉の出現頻度が高かったヲ格名詞句上位 20 位以内の結果である:

(19) 他動詞〈隠す〉の出現頻度が高かったヲ格名詞句上位 20 位以内のもの

(総出現数; 順位)

身 (227 例; 1 位)、顔 (171 例; 2 例)、事 (136 例; 3 例)、姿 (107 例; 4 位)、驚き (41 例; 5 位)、事実 (39 例; 6 位)、物 (34 例; 7 位)、気持ち (27 例; 8 例)、死体 (25 例; 9 例)、“人名” (22 例; 10 位)、色 (22 例; 10 位)、体 (21 例; 12 例)、部分 (21 例; 12 位)、戸惑い (19 例; 14 位)、動揺 (19 例; 14 位)、表情 (19 例; 14 位)、感情 (18 例; 17 位)、真実 (18 例; 17 位)、身分 (18 例; 17 位)、喜び (17 例; 20 位)、不安 (17 例; 20 位)、目 (17 例; 20 位)

全てとは言えないものの、上記の結果から他動詞〈隠す〉はヲ格に“身体(部位)”に関する名詞(「身」「顔」「体」等)、“感情”を表す名詞(「驚き」「気持ち」「戸惑い」等)、“事象”を表す名詞(「事」「事実」等)を比較的取りやすいと考えられる。特にヲ格に“感情”を表す名詞や“事象”を表す名詞が来るとき、〈隠す〉は「物事を人に知られないようにする。秘密にする。」(=10c)の意味で解釈されやすくなることが推察される。

(20) 他動詞〈隠す〉のヲ格に“感情”表す名詞が来る例:

- a. しかし突然、なにもない空間からディスクリート達が現われたのを目撃しては、さすがに驚きを隠せないようだ。(冨木忍『両手をひろげて!』2001年)
- b. 吐く息が乱れ、瞳が不安定に揺れていたが、その動揺を隠すように彼女は眼を閉じてしまった。(夏堀正元『渦の真空』1997年)
- c. 「あの、夕食の準備がしてあるんです。よろしかったら一緒にいただきたいわ」それこそ、待っていた言葉だった。だが柚木は喜びを隠して、わざとそっけなく言った。「独身にはうれしいお誘いですが、僕じゃご迷惑でしょう」

(子母澤類『蜜宴の媚薬師』2003年)

- d. それが必死に笑いをこらえている姿だと気づいたとき、セイルは、恐れの色を隠すことができなかった。

(篠崎砂美『魔封の大地アंकローゼ』1992年)

- e. 意気込んだぶん、はぐらかされた思いが強いのだろう。それは堀井刑事以下、他の捜査陣も同様だ。木更津に至っては落胆の色を隠そうともしていない。

(麻耶雄嵩『翼ある闇:メルカトル鮎最後の事件』1993年)

また、ヲ格名詞句に“身体(部位)”に関する名詞が来る場合は再帰的な意味合いを持つ場合が多いと考えられる。(21)はヲ格名詞句に「顔」「姿」という“身体(部位)”に関する名詞を取る用例であるが、これらは全て自分の行為が自分自身に及んでいると解釈することが出来るだろう:

- (21) a. ハトはすぐ近くまで来るので簡単に写せるのですが、スズメは数メートル以内には近づいてくれません。そのときには姿を隠して近づいてくるチャンス待ちます。これを待機撮影といいますが、カーテンの隙間などからカメラだけを出しておきます。

(森村進『女性のためのオートカメラ自由自在』1989年)

- b. 勇敢な男でしたが、張学良が国民党と手を結んだため、身の危険を感じてどこかに姿を隠したときいていました。

(胡桃沢耕史『闇神:伊達順之助伝』1993年)

- c. 六兵衛の手の者は、もう一度、小次郎を確認すると見物人のなかに沈没するように姿を隠した。

(志津三郎『鬼の武蔵』2002年)

- d. モハメッドが夫を連れて女性部屋の入口にやってきた。お母さんは顔を隠したまま挨拶したが、お嫁さんのほうは部屋の奥に座ったまま背中を向けてかたくなっていた。

(樋口健夫/樋口容視子『住んでみたサウジアラビア』1986年)

- e. 彼は片手にローソクを持っていたが、でも帽子をまぶかにかぶり、厚手のオーヴァの衿を立てて顔を隠していた。

(アガサ・クリスティー著/蒔沢忠枝訳『謎のエヴァンズ殺人事件』1989年)

- f. 妖精はその恋を拒まれたため、「森にひそみ、恥ずかしい顔を木の葉で隠し、それ以来、さみしい洞窟に暮らしている。だが、それでも恋心は消えず、

退けられただけに、悲しみはつものる。

(ニルダ・グリエルミ著/谷口勇訳『『バラの名前』とボルヘス:エコ、ボルヘスと八岐の園』1995年)

更に注目すべき点として、ヲ格名詞句に出現しやすい名詞の上位に「人名」が入っており、有情物（[+animate]）を取りやすい傾向が見られることが挙げられる。沼田（1989）では、基本的に「意図的に人から見えなくなる所に身を置く」という意味の自動詞〈隠れる〉に対応する他動詞〈隠す〉は用法として存在せず、代わりに〈匿う〉が対応するとしているが、ヲ格に「人名」が来る他動詞の用例の中には、〈匿う〉で置き換えることが出来るような〈隠す〉の用例も存在する<sup>12</sup>：

- (22) a. 彼らは、《U - 九百七十七号》の神秘的な事件を解明するために、わざわざアルゼンチンに派遣された査問委員だった。この人々は、実に頑迷だった。「お前はヒトラーを隠した（匿った）に違いない。さあ、話したまえ！ ヒトラーはどこにいるのだ！」という調子である。

(ハインツ・シェッファー著/横川文雄訳『U-ボート 977』2001年)

- b. 行き先は決まっている、と凜子は一人で美保の家に乗り込んだ。「恭一、どこにいるの？あなた、恭一をどこに隠した（匿った）の？」玄関を開けるなり駆け込んだ凜子はいつにも増して険しい形相だった。

(多田洋一『愛のソレア』2004年)

- c. [...] 婚約者の吉崎は隣の部屋に身を潜めていたってこともわかりました。そうしないとますます益川が興奮し、騒ぎが大きくなると姉妹が心配して、吉崎を隣の部屋に隠した（匿った）わけです。

(和久峻三『容疑者は赤かぶ検事夫人』1990年)

### 4.3. 自動詞〈隠れる〉と他動詞〈隠す〉の構文的対応について

4.1.1 節及び 4.2 節において、自動詞〈隠れる〉のガ格名詞句と、他動詞〈隠す〉のヲ格名詞句に出現しやすい名詞について分析した。本節では、これまでの議論を基にして、〈隠れる〉のガ格名詞句と〈隠す〉のヲ格名詞句に共通して出現しやすい名詞句の特徴について、コーパスで調査したデータを基に分析を試みる。(23) は、自動詞〈隠れる〉のガ格と他動詞〈隠す〉のヲ格の 20 位以内に共通して出現した名詞句の一

<sup>12</sup> (22) の〈匿った〉の部分は筆者によるものである。



覧である。

(23) 自動詞ガ格と他動詞ヲ格の 20 位以内に共通して現れた名詞

(自動詞「隠れる」の用例数,順位; 他動詞「隠す」の用例数, 順位)

顔 (16 例, 2 位; 171 例, 2 位)、「人名」(29 例, 1 位; 22 例, 10 位)、物 (9 例, 5 位; 34 例, 7 位)、姿 (4 例, 9 位; 107 例, 4 位)、部分 (5 例, 7 位; 21 例, 12 位)

全てとは言えないものの、自動詞〈隠れる〉ガ格名詞句と他動詞〈隠す〉のヲ格名詞句には、比較的、何かの一部・一側面を表す名詞(「顔」「部分」「姿」等)を共通して取りやすいことが考えられる。自動詞〈隠れる〉と他動詞〈隠す〉が構文的な対応を持ちやすいのは、典型的には下記のような何かの一部・一側面を表す名詞であることが推測される。

(24) 自動詞〈隠れる〉のガ格名詞句に「顔」を取る例

- a. 風野が答えると、衿子は顔がすっぽりと隠れてしまうほどのメニューを開いた。しばらく迷った末、オードブルに生ガキとコンソメ、メインに仔牛のブドウ酒煮を頼む。(渡辺淳一『愛のごとく』1984 年)
- b. 妻の顔が長い髪に隠れている。(神崎京介『吐息の成熟』2005 年)
- c. 飛び出して行って、重森の身体を貞子から引き離したくてならない。顔が隠れるたび、ふたりがキスしているのではないかという妄想に苦しめられた。(鈴木光司『バースデイ』1999 年)
- d. 彼らの多くは、なぜかサングラスをかけている。それも、あの日活時代の小沢昭一風の、人相の悪くなる色濃いサングラス。それにまた、顔が半分隠れるほど大きなマスクをかけている。(武田亨『中国ひとり旅: そこを何とか泊めて下さい』1991 年)

(25) 他動詞〈隠す〉のヲ格名詞句に「顔」を取る例 (≒21) :

- a. モハメッドが夫を連れて女性部屋の入口にやってきた。お母さんは顔を隠したまま挨拶したが、お嫁さんのほうは部屋の奥に座ったまま背中を向けてかたくなっていた。(樋口健夫/樋口容視子『住んでみたサウジアラビア』1986 年)
- b. 彼は片手にローソクを持っていたが、でも帽子をまぶかにかぶり、厚手のオー

ヴァの衿を立てて顔を隠していた。

(アガサ・クリスティ著/蒔沢忠枝訳『謎のエヴァンズ殺人事件』1989年)

- c. 妖精はその恋を拒まれたため、「森にひそみ、恥ずかしい顔を木の葉で隠し、それ以来、さみしい洞窟に暮らしている。だが、それでも恋心は消えず、退けられただけに、悲しみはつる。

(ニルダ・グリエルミ著/谷口勇訳『バラの名前』とボルヘス:エコ, ボルヘスと八岐の園』1995年)

(26) 自動詞〈隠れる〉のガ格名詞句に「部分」が来る例:

- a. スカートの上の部分が上着で隠れるのならクリップで留めてみては？  
(Yahoo! 知恵袋 2005年)
- b. 煙突は左端、テナダは右側に描かれる。ではどうしてそうなるのか。答えは簡単。まず先端から描いていくほうがバランスを取りやすいからで、右利きの人の場合、描いた部分がペンを持つ手で汚れたり、隠れたりすることが少ない左頭で、ということだ。  
(広田尚敬『鉄道写真』2002年)
- c. タートルネックも試しましたが、首の部分が重たい感じになってしまい、ドレスのかわいらしさが損なわれました。他のお子さんと、同じくドレスの上にカーディガンを羽織っている子がいましたがカワイイ部分がかくれてしまいちょっと残念な感じがしました。  
(Yahoo! 知恵袋 2005年)

(27) 他動詞〈隠す〉のヲ格名詞句に「部分」が来る例

- a. 彼はそこに軟膏を塗り、頭の禿げた部分を苦心して隠し、執拗に口ひげをなでつけた。  
(マーガレット・P・ブリッジズ著/春野丈伸訳『わが愛しのワトスン』1992年)
- b. 国語辞典を開いて説明の部分を隠してそこに何が書いてあるかを考えます。そうすると何とも言えない感覚になるはずです。  
(ますこまさき『これは一英語学習者の反乱です。』2002年)
- c. 藍はバスを降りると、もう戸を閉めたその漬物屋の前に立って、店の正面、二階の部分をスッポリ隠している大きな看板をじっと見上げた。  
(赤川次郎『神隠し三人娘: 怪異名所巡り』2005年)

(28) 自動詞〈隠れる〉のガ格に「姿」が来る例:

- a. 書記官はすぐ視線をもどすと、そのまま大広間を歩み去っていった。その姿が、回廊のですりの陰に隠れて消えた。

(佐々木譲『ストックホルムの密使』1997年)

- b. 幼い少女の姿が隠れるほどにびっしりと巣くっているのは体長五十センチほどの真っ黒な獣の群れ。 (牧原朱里『刻の棲人』2001年)
- c. [...] 池越しに見える楼閣の窓から、姫惶の顔が覗いていた。王英の視線に気づいてか、ふと姿が隠れる。「何か?」「いや」王英は、軽く亭を下りると門のほうへと歩きだした。 (狩野あざみ『亡国の微笑』1997年)

(29) 他動詞〈隠す〉のヲ格に「姿」が来る例 (=21) :

- a. ハトはすぐ近くまで来るので簡単に写せるのですが、スズメは数メートル以内には近づいてくれません。そのときには 姿を隠して近づいてくるチャンスを待ちます。これを待機撮影といいます。カーテンの間隙などからカメラだけを出しておきます。 (森村進『女性のためのオートカメラ自由自在』1989年)
- b. 勇敢な男でしたが、張学良が国民党と手を結んだため、身の危険を感じてどこかに 姿を隠したときいていました。 (胡桃沢耕史『闘神:伊達順之助伝』1993年)
- c. 六兵衛の手の者は、もう一度、小次郎を確認すると見物人のなかに沈没するように 姿を隠した。 (志津三郎『鬼の武蔵』2002年)

また、4.2節でも言及したように、有情物である「人名」が自動詞〈隠れる〉のガ格名詞句と他動詞〈隠す〉のヲ格名詞句の双方に出現しやすいことが注目すべき点として挙げられる。

前述したように、沼田(1989)では、自動詞〈隠れる〉が「何かに遮られて対象が見えなくなる」という意味を持つ場合は他動詞の〈隠す〉が対応するのに対して、「意図的に人から見えなくなる所に身を置く」という意味を持つ場合、他動詞〈隠す〉は対応せず、代わりに〈匿う〉という動詞が対応するとしているが、コーパスの実例では、「意図的に人から見えなくなる所に身を置く」という自動詞の意味に対応すると考えられる他動詞〈隠す〉の用例も出現することが分かる (=31a-c)。

(30) 自動詞〈隠れる〉のガ格名詞句に「(人名)」が来る例:

- a. そうやって喫煙室に戻り、同じ半地下の端に広がる「大ホール」に向かおうとしたとき、何気なく後ろを振り返った。細い曲がり階段の下の薄闇に、天田原が隠れていた。

(青山繁晴『文學界』平成14年4月号; 第56巻第4号)

- b. 妻ガイアを抱擁しようと地上に降りてきて、大地に覆い被さろうとしたその瞬間、アドニスが隠れていた場所から躍り出た。

(吉田敦彦『面白いほどよくわかるギリシャ神話』2005年)

- c. アマテラスが岩戸に隠れて世界が真っ暗になってしまったとき、八百万の神々がどうしたらアマテラスを岩戸の外へひっぱり出すことができるか相談したところだという。

(高山文彦『鬼降る森』2004年)

(31) 他動詞〈隠す〉のヲ格名詞句に「(人名)」が来る例(≒22)：

- a. 彼らは、《U - 九百七十七号》の神秘的な事件を解明するために、わざわざアルゼンチンに派遣された査問委員だった。この人々は、実に頑迷だった。「お前はヒトラーを隠したに違いない。さあ、話したまえ！ヒトラーはどこにいるのだ！」という調子である。

(ハインツ・シェッファー著/横川文雄訳『U-ボート 977』2001年)

- b. 行き先は決まっている、と凧子は一人で美保の家に乗り込んだ。「恭一、どこにいるの？あなた、恭一をどこに隠したの？」玄関を開けるなり駆け込んだ凧子はいつにも増して険しい形相だった。

(多田洋一『愛のソレア』2004年)

- c. [...] 婚約者の吉崎は隣の部屋に身を潜めていたってこともわかりました。そうしないとますます益川が興奮し、騒ぎが大きくなると姉妹が心配して、吉崎を隣の部屋に隠したわけです。

(和久峻三『容疑者は赤かぶ検事夫人』1990年)

- d. 立ち上がっている雄牛の大きな図体がマリアを隠している<sup>13</sup>。

(マリア・ヴァルトルタ著/吉向キエ訳『私に啓示された福音』2002年)

逆に他動詞のヲ格では上位に来ていた“感情”を表す名詞は、自動詞のガ格には現れにくい傾向が垣間見える。実際に、“感情”を表す名詞をヲ格に取る他動詞〈隠す〉の用例を自動詞文に直すと、容認度が大きく落ちる。通常“感情”というものは、動作主体である人が、非意図的に抱くものであり、それを「隠す」ためには、必ず動作主の意志が必要となる。つまり、“感情”を表す名詞の場合、それが自発的に、もしくは自然に「隠れる」という状態になることは考えづらい。そのため、動作

<sup>13</sup> (31d) は、「何かに遮られて対象が見えなくなる」という意味の自動詞〈隠れる〉に対応する用例と考えられる。(cf. (7))

主の存在を構文上、非明示化する自動詞表現とは馴染みづらいことが推測される。

“感情”を表す名詞と〈隠す〉のコロケーションは、構文的な自他対応を考える上では、他動詞特有の用法として解釈すべきであろう。

(32) 他動詞〈隠す〉のヲ格に“感情”表す名詞が来る例:

- a. しかし突然、なにもない空間からディスクリート達が現われたのを目撃しては、さすがに驚きを隠せないようだ。

(冨木忍『両手をひろげて!』2001年)

- b. \*しかし突然、なにもない空間からディスクリート達が現われたのを目撃しては、さすがに驚きが隠れないようだ。

- c. 吐く息が乱れ、瞳が不安定に揺れていたが、その動揺を隠すように彼女は眼を閉じてしまった。

(夏堀正元『渦の真空』1997年)

- d. \*吐く息が乱れ、瞳が不安定に揺れていたが、その動揺が隠れるように彼女は眼を閉じてしまった。

- e. 週刊誌の女性問題などで急速に求心力が低下する山崎拓自民党幹事長の調整力に早くも疑問の声が上がっており、公保両党は不安を隠しきれないのが実情だ。

(琉球新報社「琉球新報 朝刊」2002/5/19)

- f. \*週刊誌の女性問題などで急速に求心力が低下する山崎拓自民党幹事長の調整力に早くも疑問の声が上がっており、公保両党は不安が隠れきれないのが実情だ。

- g. 「あの、夕食の準備がしてあるんです。よろしかったら一緒にいただきたいわ」それこそ、待っていた言葉だった。だが柚木は喜びを隠して、わざとそっけなく言った。「独身にはうれしいお誘いですが、僕じゃご迷惑でしょう」

(子母澤類『蜜宴の媚薬師』2003年)

- h. \*「あの、夕食の準備がしてあるんです。よろしかったら一緒にいただきたいわ」それこそ、待っていた言葉だった。だが柚木は喜びが隠れて、わざとそっけなく言った。「独身にはうれしいお誘いですが、僕じゃご迷惑でしょう」

- i. [...]そうした事実を前にいらだちを隠せない人間のありようこそが、高齢者精神医療の専門家としての、私の出発点でした。

(斎藤正彦『老人病院:青梅慶友病院のこころとからだのトータルケア』2002年)

- j. \*[...]そうした事実を前にいらだちが隠れない人間のありようこそが、高齢者精神医療の専門家としての、私の出発点でした。

また、自動詞のガ格名詞句の上位に来ていた「太陽」や「月」は、他動詞のヲ格には出現しにくいものの、僅かながら用例が散見される。この場合、基本的に“自然力”が他動詞文の主格に相当することになるが、このときは「動作主」に準じるものとして解釈されていると言えるだろう：

(33) 他動詞〈隠す〉のヲ格に「太陽」「月」が来る例：

- a. しかし、雲は、半分三日月を隠しただけで、下を通りすぎました。  
(福永令三『クレヨン王国森のクリスマス物語』1990年)
- b. 麦の刈り入れの終わった畑がうっすらと暗くなり、見上げると太陽を隠すようにひとつ雲が浮かんでいるのが見えた。  
(乙一『夏と花火と私の死体』2000年)

## 5. まとめ・今後の課題

本稿では、主に「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を使用し、自動詞〈隠れる〉と他動詞〈隠す〉の対応について考察した。自動詞〈隠れる〉のガ格名詞句は、有情物と無情物の双方を取ることが出来るが、今回の調査では無情物を取る用例の方が比較的多く抽出された。また、場所を表す二格を伴う場合、ガ格名詞句は有情物になりやすく、その場合は二格をデ格に置き換えにくいという傾向が垣間見えてきた。これは、デ格が「原因」「手段」を表すものとして再解釈できることによるものと分析した。

一方で他動詞〈隠す〉のヲ格名詞句には、“身体(部位)”に関する名詞、“感情”を表す名詞、“事象”を表す名詞等が比較的来やすく、また、「人名」がヲ格に来る用例もコーパス上では、比較的多く存在し、先行研究では対応しにくいとされていた「意図的に人から見えなくなる所に身を置く」という意味の〈隠れる〉に対応するような〈隠す〉の用例も散見された。〈隠れる〉のガ格と〈隠す〉のヲ格に共通して現れやすいのは、何かの一部・一側面を表す名詞である一方で、“感情”を表す名詞は〈隠す〉のヲ格にのみ現れやすいことを可能性の一つとして紹介した。

本稿では大まかな傾向の分析にとどまり、根拠ある形での一般化に踏み込むことは出来なかった。また、調査の過程で、自動詞〈隠れる〉の用例をガ格名詞句に限定し

たことが、出現する用例に偏りを生じさせてしまった可能性がある。語用論的にはガ格を標示すること自体が有標である可能性も考えられる。〈隠れる〉の主語にどのような名詞が来やすいかは、今回の調査では断定することができない。また、自動詞〈隠れる〉と他動詞〈隠す〉の対応における二格とデ格の交替現象については、大まかな用例の分析にとどまっており、今後 BCCWJ 等を使用し、より詳細に用例を観察する必要がある。

また、今回は出現数の多かった名詞上位 20 位を中心に比較し分析を行う形をとったが、自動詞〈隠れる〉と他動詞〈隠す〉には用例数に大きな乖離があり、単純に比較することは問題を含んでいると言わざるを得ない。

調査方法・分析方法の再考に加え、二格成分も含めた自動詞と他動詞の構文的な対応について個々の用例に基づいて、細かく分析を加えていくとともに、〈乗る〉vs. 〈乗せる〉、〈進む〉vs. 〈進める〉といったガ格名詞句が「動作主」及び「(変化の)対象」の双方で解釈可能な他の動詞類と比較し、構文的な類似点や相違点について明らかにしていくことが、今後の課題である。

## 参考文献

- 奥津 敬一郎 (1967), 「自動化・他動化および両極化転形: 自・他動詞の対応」『国語学』70, pp.46-66.
- 川野 靖子 (1997), 「位置変化動詞と状態変化動詞の接点: いわゆる「壁塗り代換」を中心に」『筑波日本語研究』2, pp.28-40.
- 川野 靖子 (2001), 「いわゆる「壁塗り代換」における動詞の条件」『筑波日本語研究』6, pp.61-72.
- 川野 靖子 (2002), 「自動詞文における二種類の代換現象と所有関係: 『N1 ガ N2 デ〜』と『N1 ガ N2 ニ〜』の違いを中心に」『日本語文法』2(1), pp.22-42.
- 川野 靖子 (2004), 「『桜の葉に餅をくるむ』と『餅を桜の葉でくるむ』: 壁塗り代換との関連性」『香椎潟』50, 福岡女子大学国文学会, pp.1-14.
- 川野 靖子 (2006), 「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象: 格成分の対応の仕方」『日本語の研究』2(1), pp.32-47.
- 北原 保雄 編 (2010), 『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店.
- 佐藤 琢三 (1994), 「動詞の自他対応と様態指定」『筑波応用言語学研究』1, pp.21-32.
- 新屋 映子 (1994), 「存在文における『場所ニ』と『場所デ』」『津田塾大学紀要』26, pp.125-142.

沼田 善子 (1989), 「日本語動詞 自・他の意味的対応 (1):多義語における対応の欠落から『研究報告集 (10)』 国立国語研究所報告 96, pp.193-215.

早津 恵美子 (1987), 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」 『言語学研究』 6, 京都大学言語学研究会, pp.79-109.

矢澤 真人 (1994), 「『格』と階層」 森野宗明教授退官記念論文集編集委員会(編) 『森野宗明教授退官記念論文集: 言語・文学・国語教育』 三省堂, pp.101-118.

矢澤 真人 (1997), 「発生構文と位置変化構文」 『筑波日本語研究』 2, pp.1-13.

#### 調査資料・用例出典

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス・NINJAL-LWP for BCCWJ』

**付記** 本稿を著すにあたり、筑波大学大学院人文社会科学研究所文芸・言語専攻応用言語学領域の杉本武先生に授業において大変貴重なコメントを頂いた。ここに記して感謝申し上げます。

せきぐち ゆうき/人文社会科学研究所  
(2018年10月15日 受理)